

第13回 椋の実句会 (二〇二一年一月九日) 兼題 「髪」

119. 冬草や髪切ることも古い支度 (野いちぢい) 10点

◎雀：冬支度ならぬ「古い支度」、冬草というさつぱりとした季語も散髪とマッチして心に残る句でした。

139. 日の差して十一月の母の家 (野いちぢい) 7点

◎からむし：さりげない句だが、母との距離感が甘くもなく厳しくもなく、いい感じ。

48. 冬近しちよつと覗いて理髪店 (千代志) 5点

◎智子：卑近さがいい味だしていると思います。

60. 霜月の虚無をチョコレートで埋める (千津子) 4点

◎雀：「霜月の虚無」にいたく共感するのは、まだ慌ただしい師走でもなく、行楽シーズンもそろそろ終わる、そんな中途半端な時期だからか。チョコレートへの飛躍(墮落?)にも共感。

37. 桐の実の見えてその先よ母校 (ようい) 2点

◎雀：懐かしさに胸が詰まるような心持ちが伝わってくる。記憶のとおり母校。破調が効いています

110. ぐさをりはぐさしい嘘をら・ぐらんす (翠筆) 18点

◎指月：「嘘」以外は全部ひらがな！ラフランスのフォームも併せ、なんとも印象的です。

135. ぬくもりを畳みて返す膝毛布 (薑子) 12点

◎りん：冷えた身体に差し出された有難い膝毛布を丁寧に畳んで返す。心まですっかり温かくなりました。

33. 埋火の尉に火箸を鳴らしけり (つかさ) 7点

◎雀：白い灰の中に埋火がある囲炉裏端の情景。火箸を鳴らすというリアリティがいいです。

49. 冬麗の髪にいたたく天使の輪 (くるみ) 7点

◎漣：晴れ渡った冬日が黒髪に天使の輪を作っている。いただくの言葉も良く若々

70. 言ふは今蜜柑の筋をはがしつ (指月) 4点

◎雀：食事の後の静かな円居。めいめいが蜜柑に目を落として手を動かしている。そんなときなら言い出せる。微妙な心理をうまく表現しました。

141. 万象の枯るるはじめに狗尾草 (山口眞登美) 4点

○雀：猫じやらしの枯れた姿は真つ先に目に留まる。万象というスケールの大きさとの対比が素敵です。

89. 欠伸して鼓膜がポンと紅葉かな (千代志) 3点

○雀：耳のとおりがよくなった気がするのと、ぱつと紅葉した木々の明るさと。展開が面白いです。

31. 天窓にどんぐりの音髪を梳く (みやこ) 2点

○雀：日常の一コマである「髪を梳く」という行為に耳が澄んでくる感覚は秋の深まりを思わせました。ただ「雨の音」や「風の音」と違って「どんぐりの音」は、木の実が「落ちる音」としての表現を工夫することが必要だと思います。「降る」「落ちる」「当る」「弾む」などの描写で「音」を言わなくても「音」を想起させることができます。

44. 秋葉黄の揺るる二年逢へぬ間の (節子) 1点

○雀：不思議な感覚の句です。熟れた赤い実の向うに逢えたはずの時が流れているような。

13. 薪を割るしづけさばかり柿日和 (裕章) 2点

◎翠筆：薪割りの音以外、しんとした世界。山の暮らしに柿の木が寄り添う。

28. 七三に髪を固めて新酒売 (三晴) 4点

◎ようこ：七三に分けた髪にすつきりとした新酒の美味しさが伝わってきます。ポサボサの髪ではねえ。